原　著

転倒を予測する看護師の「直感」に関する1考察

三宅美奈子，精山　由希，松本　栄子，池本ちひろ
労働者健康福祉機構山陰労災病院

（平成20年5月16日受付）

要旨：【目的】患者の転倒を予測するA病院病棟看護師の直感を創る要因について検討する．

【方法】

調査対象は平成18年3月A病院病棟勤務看護師176名で無記名の自記式質問紙調査を行った．調査内容は転倒に関する直感の有無（以下直感的に予測していたものを『直感あり群』予測していなかったものを『直感なし群』とする），属性（年齢別4段階，経験年数別3段階），直感的危険度のイメージ23項目を集計・分散分析．危険率5%以下を有意差とした．倫理的配慮は個人が特定されない事，本研究の目的以外に使用しない事を約束し同意を得た．

【結果】

1）転倒に関する直感の有無：『直感あり群』94.8%，『直感なし群』5.2%であった．

2）直感的危険度のイメージで高値を示した項目は，『直感あり群』・『直感なし群』共に「移動動作が不安定」が最も多かった．『直感あり群』で年齢別において有意差を認めた項目は，20歳代は「年齢」，30歳代は「補助具を使用している」「不穏」，50歳代は「頻尿・下痢がある・排泄介助が必要である」「転室・転棟後」であった．経験年数別において有意差を認めた項目は特に11年以上において，「頻尿・下痢，下剤・利尿剤を内服している」が高値を示していた．

【結論】

1. 『直感あり群』は94.8%であった．
2. 『直感なし群』の87.5%が，経験年数10年以下であった．
3. 直感的に重視していた項目は，「移動動作が不安定」「認知症・見当識障害がある」「不穏」であった．
4. 経験年数11年以上の看護師は排泄関連行動を重視していた．

（日職災医誌，56：235―238，2008）

―キーワード―
転倒，転落，直感，予測因子

目　的

患者の転倒を予測するA病院病棟看護師の直感を創る要因について検討する．

言葉の定義

・転倒：自分の意思からではなく，身体の足底以外の部分が床に着いた状態

・直感：説明や証明を得ないで物事の真相を心で感じ知ること

・直感的危険度のイメージ：A病院のアセスメントスコアシートを基に泉らの文献等を参考に独自に作成した項目

・アセスメントスコアシート：A病院の「転倒・転落アセスメントスコアシート」

方　法

1）調査対象は平成18年3月A病院病棟勤務看護師176名で無記名の自記式質問紙調査を行った．2）調査内容は転倒に関する直感の有無（以下直感的に予測していたものを『直感あり群』予測していなかったものを『直感なし群』とする），属性（年齢別4段階，経験年数別3段階），直感的危険度のイメージ23項目（①年齢②移動動作が不安定③筋力低下がある④麻痺・しびれがある⑤補助具を使用している⑥視力障害がある⑦頻尿・下痢がある・排泄介助が必要である⑧認知症・見当識障害⑨視

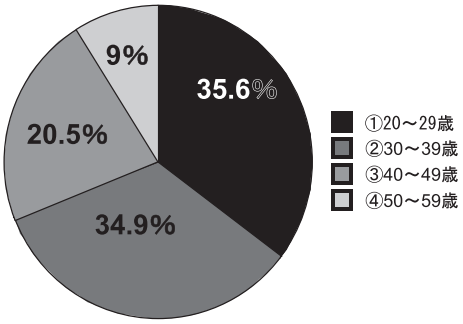


図 1　年齢別直感の有無
あり群

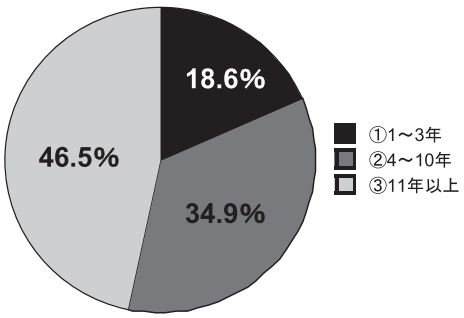


図 3　経験年数別直感の有無
あり群

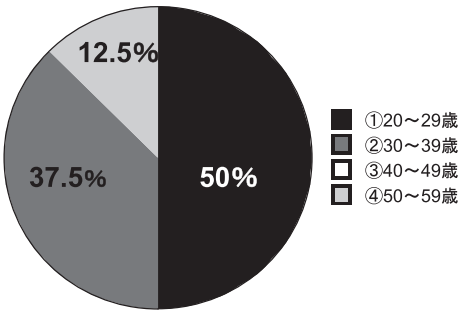


図 2　年齢別直感の有無
なし群

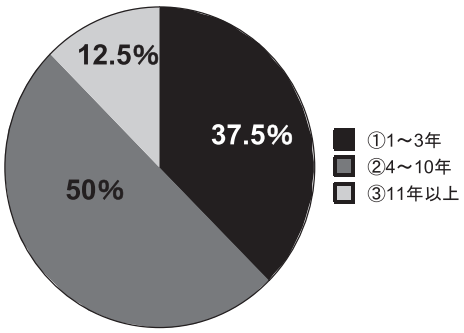


図 4　経験年数別直感の有無
なし群

線が合わない⑩パーキンソン氏病がある⑪精神状態の不安定がある（不穏）⑫判断力・理解力の低下がある⑬手術後⑭転室・転棟後⑮入院日⑯性格⑰眠剤・安定剤を内服している⑱下剤・利尿剤を内服している⑲鎮静剤・麻薬を使用している⑳持続点滴をしている㉑栄養状態が悪い㉒最近転倒経験がある㉓アセスメントスコアシートのポイントが高い．3）分析方法は統計ソフト StatView 5.0 を用いた集計，集計・分散分析．危険率 5% 以下を有意差とした．4）倫理的配慮：個人が特定されない事，本研究の目的以外に使用しない事を約束し同意を得た．

結　　果

1）転倒に関する直感の有無：『直感あり群』146 名（94.8%），『直感なし群』8 名（5.2%）であった．年齢は『直感あり群』では，20 歳代は 35.6%，30 歳代は 34.9%，40 歳代は 20.5%，50 歳代は 9%（図 1），『直感なし群』では，20 歳代は 50%，30 歳代は 37.5%，40 歳代は 12.5%，50 歳代は 0% であった（図 2）．経験年数は『直感あり群』では，1～3 年は 18.6%，4～10 年は 34.9%，11 年以上は 46.5%（図 3），『直感なし群』では，1～3 年は 37.5%，4～10 年は 50%，11 年以上は 12.5% であった（図 4）．

2）直感的危険度のイメージで高値を示した項目は，『直感あり群』では，「移動動作が不安定」がもっとも多く，次に「認知症・見当識障害がある」「不穏」の順であった．『直感なし群』では，「移動動作が不安定」「パーキンソン氏病」「不穏」の順であった．「パーキンソン氏病」についてのみ有意差を認めた．『直感あり群』で年齢別において有意差を認めた項目は，20 歳代は「年齢」，30 歳代は「補助具を使用している」「不穏」，50 歳代は「頻尿・下痢がある・排泄介助が必要である」「転室・転棟後」であった（表 1）．経験年数別において有意差を認めた項目は，「頻尿・下痢がある・排泄介助が必要である」「認知症・見当識障害」「視線が合わない」「性格」「眠剤・安定剤を内服している」「下剤・利尿剤を内服している」の 6 項目で特に 11 年以上において，「頻尿・下痢，下剤・利尿剤を内服している」が高値を示していた（表 2）．

考　　察

A 病院の看護師の『直感あり群』は，94.8% と大半を占めており，A 病院における転倒・転落アセスメントスコアシートの活用により，転倒について看護師の意識の定着化がされつつあると考える．『直感なし群』は 5.2% で，その内 20 歳代 50%，経験年数 3 年以下が 37.5% を占めており，若年層は経験も少ないため，直感の比率も低く転倒予測がしにくいと思われる．A 病院の看護師は「移動動作・認知症・不穏」を重視しており，患者自身を見て身体面と精神面を包括してその状況を描いている傾向にあると言える．年齢・経験年数別に見ると，年齢・経験年数が高い看護師ほど「頻尿・下痢がある・排泄介助が必要である」「下剤・利尿剤を内服している」が高値

表１　年齢別危険度のイメージ
（有意差のある項目）

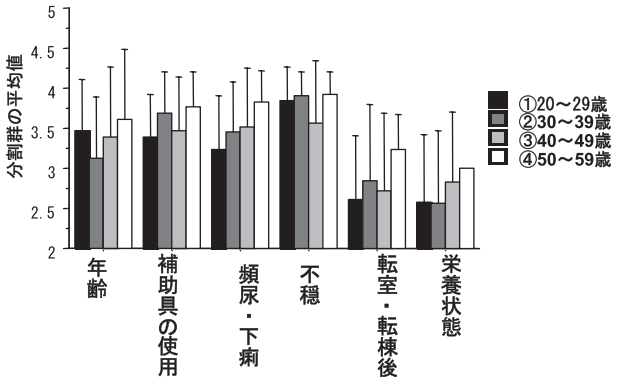
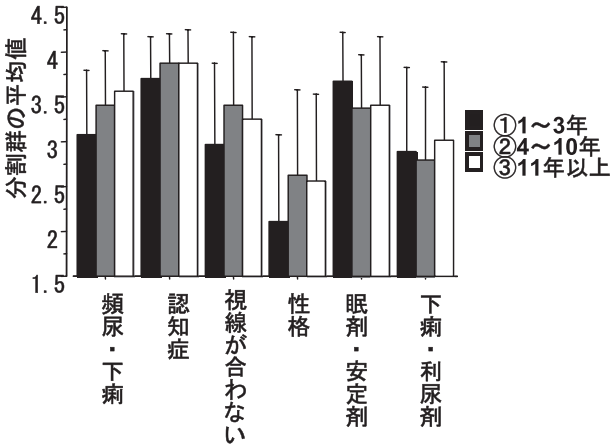


表２　経験年齢別危険度のイメージ
（有意差のある項目）



を占めており，必須の生理的行動である排泄関連行動を重視している．A 病院は 4 年以上の看護師が全体の 80％を占めている為，患者の入院前の生活習慣や性格の特徴を早期につかみ，総合的に臨床判断を行っている傾向にあり，年齢・経験年数による違いを認めたと考える．転倒は重大な精神的・肉体的障害を引き起こすため，我々にとって転倒防止は安全な療養環境を保証する上で重要な課題である．今回の研究結果は，現状把握にすぎない．転倒は環境要因，外的要因，内的要因というさまざまな要因があげられる．今後，転倒に対する意識が更に高まり，日常業務の中に転倒防止の視点を根づかせる事が大切であると考える．そして，患者の疾患・行動のみでなく，患者の視線に立った認識や環境など幅広く観察し，転倒予測・予防につなげられるよう取り組んでいきたい．

文　献

1）泉キヨ子：EBN で防ぐ転倒・転落．EBNURSING　2（1）：16―27, 2002.

別刷請求先　〒683-8605　鳥取県米子市皆生新田 1―8―1
労働者健康福祉機構山陰労災病院
三宅美奈子

Reprint request:
Minako Miyake
San-in Rosai Hospital, 1-8-1, Kaike Shinden, Yonago city, Tottori pretecture, 683-8605, Japan

Characteristics of "Nurse's Intuition" for Prediction of Patient Falls

Minako Miyake, Yuki Seiyama, Eiko Matsumoto and Chihiro Ikemoto
San-in Rosai Hospital

Purpose:
To study the predictive factors which produce "nurse's intuition" for patient falls.
Method:
An unsigned questionnaire was performed to 176 nurses belonging to our hospital in March 2007. The questionnaire was composed with questions regarding 23 predictive risk factors for the patient falls. It asked for the presence of nurse's intuition and subsequently, categorized into two groups of those "have intuition" and of those "have no intuition". It also asked the nurse's age, and the years of nursing experience. The answers on 23 predictive risk factors were statistically analyzed using ANOVA (Analysis of Variance) by ®Stat view ver 5.0 with the significance level of 5%.
Results:
1) 94.8% of nurses reported, "have intuition"; while 5.2% reported, "have no intuition".
2) In both groups, the factor that obtained the most points was "Unstable physical movement".
3) In "have intuition" group, more points were given to "Patient's age" by nurses between 20–29 years of age, "Using Equipment" and "Mental derangement" by nurses between 30–39 years of age, "Frequent urination or diarrhea or needs excretion care" and "After room or ward change" by nurses older than 50 years of age.
4) In terms of years of nursing experience, the factor "Frequent urination or diarrhea or needs excretion care" was more emphasized by the nurses with "over 11 years of experience" than by the nurses with "1–3 years of experience" and the nurses with "4–10 years of experience".
Conclusion:
1. 94.8% of the nurses answered "have intuition".
2. 87.5% of the nurses who answered, "have no intuition" have less than 10 years of nursing experience.
3. The risk factors that have been intuitively predicted were "Unstable physical movement", "Dementia or disorientation" and "Mental derangement".
4. The nurses with over 11 years of experience emphasized the factor "Frequent urination or diarrhea or needs excretion care".

(JJOMT, 56: 235—238, 2008)

©Japanese society of occupational medicine and traumatology http://www.jsomt.jp